



発達障害児の不安症状軽減を目的とした遠隔・親介在型による家族認知行動療法プログラムの開発と有効性の検討

野上, 慶子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8537号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482285>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏 名 野上 慶子
専 攻 人間発達専攻
指導教員氏名 山根 隆宏

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

発達障害児の不安症状軽減を目的とした遠隔・親介在型による家族認知行動療法プログラムの開発と有効性の検討

論文要旨

本論文では、発達障害児の高い不安症状への介入方法を開発することを目指し、次の3点を目的とした。1) 調査研究により発達障害児の不安症状の関連要因やメカニズム、介入方法等を、定型発達児と比較しながら検討すること、2) 調査結果に基づき、発達障害児の不安症状軽減のための遠隔・親介在型による家族認知行動療法 (Family Cognitive Behavioral Therapy: FCBT) のプログラム開発と介入を実践し、その有効性を検討すること、3) 介入後の質的・量的データを統合し、本論文で開発するFCBTプログラムによる発達障害児の不安症状の変化のメカニズムをより詳細に検討することとした。

第I部では問題の所在を検討した。第1章では、発達障害児に高い不安症状が併存することにより、親子関係の悪化、学校適応および社会的能力の低下等を含む様々な問題が生じることを述べた。また、発達障害児はもとより不安症状が高くなりやすいが、そういった高い不安症状の維持要因として、母親の養育態度および不安症状の影響も考えられることや、発達障害児をもつ母親も子どもの障害によって、不安やストレスを抱えやすく、これらの問題が親子間で相互に影響しあう可能性を検討した。

第2章では、発達障害児の不安症状に対する薬物療法および心理社会的介入方法を概観した。発達障害児の不安症状への心理社会的介入においては、ペアレントトレーニング、ソーシャルスキルトレーニング、マインドフルネス等を用いたアプローチが報告されているが、不安症状の背景にある認知と行動の変容を促すアプローチとして認知行動療法 (CBT) の有効性が考えられた。また、発達障害児の不安症状に対するCBTでは、家族の関わり方が求められているため、親や家族に焦点化したFCBTがより有効である可能性が推測された。

第3章では、発達障害児の不安症状に対するFCBTに関する先行研究のレビューを行った。レビューの結果、現状のFCBT研究は親の精神的健康への注目が不十分であるとともに、親が介入の般化にどの程度関わったのかについて検討する必要性があることを述べた。また、プログラムの開発においては、親の精神的健康に対する介入や、介入参加時の親の利便性にも配慮することが必要であると考えられた。

第4章では、第1章から第3章をまとめ、本論文の目的、意義、構成を示した。発達障害児の母親の不安や養育態度等の要因から発達障害児の不安症状のメカニズムを検討した上で、子ども

の不安症状改善のためのFCBTプログラムを構築する意義を述べた。加えて、本論文の方針として、発達障害児の保護者として母親に焦点化すること、知的障害のない発達障害児を対象とすること、子どもの不安症状の評定には母親の評定を用いることを述べた。

第Ⅱ部では、第5章研究1として、発達障害児と定型発達児の母親に対する調査研究を行い、発達障害児の不安症状と母親の精神的健康および養育態度に加えて、ストレス対処力 (Sense of Coherence : SOC) の尺度を用いて、発達障害児の不安症状のメカニズムを検討した。結果、両群の母親の不安と過干渉が発達障害児と定型発達児の不安症状に正の影響を及ぼすことが示された。しかし、発達障害群ではSOCの把握可能感が母親の不安に、有意味感が過干渉に負の影響を及ぼし、母親の不安と過干渉が各々で子どもの不安症状に正の影響を与えていたが、母親の不安が過干渉に及ぼす影響はみられず、定型発達群との相違も確認された。

考察では、子どもの発達障害の有無により、母親の不安と過干渉に対するSOCの影響に相違がみられたため、両群間で子どもの不安症状のメカニズムが異なることが示唆された。発達障害群の母親の有意味感が低下すると、子どもの障害や特性を母親の人生に意味付けることが難しく、子どもの発達を促すための積極的な関わりに従事することや子どもの経験の制御等が発展し、過干渉的な養育行動につながりやすいたことが示唆された。また、子どもの発達障害の有無によって子どもの不安症状や介入方法が相違することや、発達障害児の不安症状に対するFCBTの実施の際には、母親の困難感や不安症状以外の子どもの問題の有無にも注目する必要性が考えられた。

第Ⅲ部では、発達障害児の不安症状軽減のための遠隔による親介在型FCBTプログラムの開発と予備的試行および本施行を行った。第6章研究2では、発達障害児の不安症状軽減を目的に、親介在型FCBTプログラムの開発と予備的試行を遠隔・個別形式で実践し、本施行に向けての構成要素や実施方法について検討した。開発されたプログラムの主な内容は母親自身の精神的健康向上のためのものと、子どもの不安症状への対処方法であった。母親の精神的健康に対しては、マインドフルネスや呼吸法のほか、ポジティブ感情を増やす方法、Iメッセージの使用が推奨された。一方、子どもへの対処方法については、発達障害および不安症状に関する基礎的な知識や発達障害児の不安症状軽減のための技法を教示し、これらの実践を推奨した。予備的試行の結果、母親の養育ストレス軽減のため、親同士の交流機会を設けたグループ形式による介入を行うほか、介入参加者が日常生活でプログラム内容をどの程度取り組んだのかといった情報と、子どもの不安症状以外の問題を把握する必要性が示唆された。

第7章研究3では、データ提供に協力する対照群を設けて、研究2で開発したプログラムを遠隔・グループ形式で実施した。結果、介入による子どもの社交不安の症状と母親の否定的な養育態度の減少が確認された。介入群内では、一部の不安症状において、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) と注意欠如・多動症 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder: ADHD) の診断が併存する子どもでも、ASDあるいはADHDのみ等、その他の発達障害児と同程度に不安症状が減少していた。プログラム内容に関しては、子どもが不安刺激に慣れるための取り組みを親が実践するほど、子どもの不安症状の一部や情緒の問題が軽減していた。しかし、呼吸法を実施するほど、子どもの行為の問題が減少する一方で、呼吸法の実施に伴う子どもの不安症状の高まりも確認された。また親の精神的健康の問題が軽減するほど、子どもに不安症状への対処方法を教示する行動が増加していた。プログラムのモデル検証では、子どもの不安症状の変化と母親の変数の変化との直接的な関連はみられなかったが、子どもの全般不安症の症

状の減少が子どもの総合的な困難の減少と関連し、総合的な困難の変化と親の養育態度や養育ストレス、抑うつ症状の改善と関連していた。考察では、親の介入前の不安症状の側面から、プログラム内容の取り組み方や有効性の相違を詳細に検討する必要性が示唆された。

第8章研究4では、混合研究法により、量的分析および質的分析を行った後、これらのデータを統合し、母親の介入前の不安症状がプログラムの有効性に及ぼす影響と介入参加による個々の参加者の気付きや状態・行動の変化について検討した。量的な分析では、不安高群と不安低群の母親間において、介入前の精神的健康および将来自立への不安で相違がみられたものの、プログラムへの取り組み方や有効性の側面では相違がなかった。しかし、質的データの分析によって、プログラム期間中の気付きや行動、状態の変化の側面で、11の概念から4つのカテゴリが生成され、両群間の相違が示された。不安低群でのみ【共通の悩みをもつ者の存在に気付く】に関する概念がみられた一方で、不安高群でのみ【子どもへの新たな教示に挑戦】の概念がみられた。また、量的・質的データを統合し、プログラム参加中の介入群の変化についてのモデルを提示した。モデルでは、環境面、母親の心身的状態、子どもとの関わり方、子どもの状態といった変化を、量的な指標を交えながら詳細に示した。

第IV部第9章では、本論文の総括を行った。研究1から4の総合考察として、発達障害児の不安症状のメカニズムの再検討および不安症状の変化のモデル提示を行い、遠隔・親介在型FCBTプログラムの有効性について検討し、本論文の独創性・意義、限界、今後の展望を述べた。

発達障害児の高い不安症状のメカニズムについては、母親の不安症状や養育態度のみではなく、子どもの問題行動の有無やソーシャルサポートの不足等、子どもを取り巻く環境面の問題にも注目する必要性が示唆された。次に、FCBTプログラム参加後の母親と子どもの各症状の変化の関連を踏まえながら、介入による発達障害児の不安症状の変化のモデルを生成した。モデルの生成時には、母親の精神的健康、ストレスに対する認知、養育行動が関連し合い、それら母親の要因のうち、主に養育行動を通して、子どもの問題行動と直接的に関連するほか、子どもの不安症状の一部とも間接的に関連することが示唆された。また、発達障害児の不安症状への対応方法に関する情報および周囲のサポートの不足といった外部環境が、母親と子どもの症状の変化に関連していたことも推測された。最終的なモデルでは、介入による環境・母親・子どもの各要因の変化の関連を示し、発達障害児をもつ親が子どもの様々な症状や問題に適切に対応していくには、母親の要因を変えるだけではなく外部環境からのサポートが求められることが示唆された。

さらに、FCBTプログラムの有効性については、子どもの不安症状の側面で総合的に考察した後、セッション数や親介在型、プログラム内容のパッケージ化、遠隔形式といった実施方法の利点や課題を述べながら現状のプログラムに適した対象者像を検討した。プログラムの有効性の向上には、実生活で子どもが不安刺激に馴化する取り組みが求められるため、外出頻度が低い子どもに向けては、家庭外の場面でも不安刺激に馴化する機会を支援者が提供する必要性が述べられた。また、現状のプログラムは、オンライン環境に問題がなく、発達障害児の不安症状に対する養育スキルの獲得に関心がある母親に適していると考えられた。

本論文の独創性・意義として、第1に親の介入前の不安症状に注目し介入を行った点が述べられた。本プログラムでは、親の精神的健康が子どもの不安症状に及ぼす影響の説明や、呼吸法等を含めた介入を実践し、特に介入前の不安が高い母親において不安症状の改善を報告した。また、量的および質的データの統合結果、母親の不安の程度によって介入中の気付きや変化に

相違がある可能性が示された。このことから、不安症状の高い発達障害児をもつ母親自身の不安症状に対する介入方法の新たな知見が加えられたことが示唆された。第2に、介入参加者のプログラム内容の取り組みの程度を把握し、介入効果と親要因の関連を明らかにした点も本論文の独創性として挙げられた。これらの結果から、より効果的な介入プログラムの開発だけでなく、発達障害児の不安症状の介入による変化のメカニズムに関しても意義ある知見が得られたと考えられた。

本論文の全体的な限界として、子どもの不安症状の測定方法、サンプルサイズの問題、プログラムの取り組みの程度に関する質問内容の設定方法、子どもの症状の評定方法の不足が挙げられた。まず、研究1～4を通して、子どもの不安症状の測定については母親の評定のみを用いられた点が述べられた。研究1では定型発達児の不安症状の場合は子どもの自己評定が求められていることに加え、研究2～4に関しては、平均への回帰や介入への期待値が加わっていた可能性が述べられた。またサンプルサイズの問題については、研究1で発達障害児のサンプルが少なかったほか、研究3においても介入群と対照群が均等ではなかったことが挙げられた。プログラムの取り組みの程度に関する質問内容に関しては、研究3で社交不安症に対する介入効果との関連を検討する上では十分に網羅されていなかった可能性が推測された。さらに、子どもの症状の評定方法については、研究1でも問題行動の有無を把握する必要性があったほか、研究4においては子どもの肯定的な行動や変化を多面的に評価する必要性があった点が述べられた。

今後の展望として、より多くの発達障害児の不安症状の軽減に向けて、放課後等デイサービス等、発達障害児の支援施設において子どもの日常をよく知る支援者と親との協働によるプログラムの実践について述べられた。プログラムの実施者に対しては、心理学や発達障害に関する知識や研修への参加等が求められるものの、実社会において対象児だけでなくその家族も含めた包括的な支援へと拡充されることが期待できると考えられた。

(注) 3,000～6,000字（英語の場合は1,000～2,000語）でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	野上 慶子		
論文題目	発達障害児の不安症状軽減を目的とした遠隔・親介在型による家族認知行動療法プログラムの開発と有効性の検討		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	准教授	山根 隆宏
	副 査	教授	吉田 圭吾
	副 査	教授	加藤 佳子
	副 査	関西国際 大学教授	鳥居 深雪
	副 査	助教	安達 友紀
要 旨			
本論文は、発達障害児の不安症状に焦点を当て、その関連要因の検討に基づき、発達障害児の不安症状軽減のための遠隔・親介在型による家族認知行動療法（Family Cognitive Behavioral Therapy: FCBT）のプログラム開発と効果検証を行ったものであり、以下に述べるⅣ部から構成されている。 第Ⅰ部第1章では先行研究を概観し、発達障害児の不安症状の高さの要因の一つに母親の養育態度および不安症状が考えられる一方で、発達障害児と親の精神的健康の問題が相互に影響しあう可能性を論じ、親の要因に注目する意義を論じた。第2章では、発達障害児の不安症状に対する介入方法を概観し、認知行動療法の有効性を論じた上で、発達障害児の不安症状には親や家族に焦点化したFCBTがより有効である可能性を述べた。第3章では、発達障害児の不安症状に対するFCBT研究のレビューと当該研究領域の現状課題を検討し、発達障害児の親の精神的健康および親の利便性にも配慮したプログラム構築の意義が論じられた。 第Ⅱ部研究1では、発達障害児と定型発達児の母親に対する調査を行い、母親の精神的健康、養育態度、ストレス対処力の観点から子どもの不安症状のメカニズムを検討した。結果、両群において母親の不安と過干渉が子どもの不安症状に正の影響を及ぼすことが示された一方で、ストレス対処力の下位尺度から母親の不安および過干渉に至る関連性については両群間で相違が確認されたことから、発達障害児の不安症状のアセスメントと介入時における留意点等が論じられた。 第Ⅲ部では、発達障害児の不安症状軽減を目的に親介在型FCBTプログラムの開			

発および予備的試行を遠隔・個別形式で実践した後（研究2），対照群を設けた本施行をグループ形式により行った（研究3）。その結果，いずれの実践においても介入によって子どもの不安の一部の症状と母親の否定的な養育態度の減少が示され，プログラムの一定の有効性が確認された。また，日常生活で子どもが不安刺激に慣れるための取り組み頻度が多いほど，子どもの不安症状の一部や情緒の問題が軽減していたこと等から，日常生活のプログラム実践と親子の変化との関連性について論じた。さらに研究4では混合研究法を用いて，母親の介入前の不安症状がプログラムの効果に及ぼす影響と介入による参加者個人の変化について量的および質的に検討した。量的・質的データを統合したジョイントディスプレイによって，環境面，母親の心身的状態，子どもとの関わり方，子どもの状態の要因からなる介入の変化に関するモデルを提示し，介入変化の関連要因を考察した。

第IV部では本論文の総括を行った。発達障害児の不安症状のメカニズムを再検討した上で介入による不安症状の変化のモデルを呈示し，遠隔・親介在型FCBTプログラムの有効性について検討した。また本プログラムを実社会の支援機関で実装する方法と課題について論じた。

本研究は博士論文の評価基準に従い以下のように評価を行った。

1. 発達障害児の不安症状に親の不安症状や養育態度がどのように関連するかとともに，遠隔形式の介入実践の有効性や実践上の課題や，不安症状低減の介入効果に関わる要因について新たな知見を提供し，独創性を有するといえる。
2. 発達障害児の不安症状低減を目的とした実証性のある介入プログラムや理論的根拠をもとに，有効性の高い新たな遠隔型・親介在型FCBTプログラムを開発したという点で専門的かつ学術的価値を有するものといえる。
3. 多くの発達障害児や定型発達児の親から調査協力を得て，質的・量的にデータ収集を行い，いずれも適切な統計解析・分析方法によって得られた根拠から結論を導いている点で，論文の結果が実証的に裏付けられているといえる。
4. 適切な計画で実施された調査研究や介入研究で得られたデータから考察がなされており，論旨が一貫して明確であり，論理的に展開されているといえる。
5. 発達障害児の不安症状のメカニズムと介入方法について，先行研究の実践や資料を適切にレビューし，これまでの知見や研究動向を明らかにするなど，先行研究および資料が適切かつ厳密に取り扱われているといえる。

本論文に関わり，以下の3編の査読付き論文が公刊されていることを確認した。
野上慶子(2021). ADHDと不安症の併存症の子どもに対する認知行動療法の研究動向. LD研究, 30(1), 85-96.

野上慶子・山根隆宏(2021). 自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症児の不安症状に対する家族認知行動療法の研究動向. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 14(2), 169-176.

野上慶子・山根隆宏(印刷中). 発達障害児の不安症状と母親の精神的健康の改善を目的としたオンライン家族認知行動療法プログラムの開発と効果検証. 自閉スペクトラム症研究, 20(2).

本審査委員会では，以上の点に基づき，本研究が発達障害児の不安症状軽減に関わる要因と家族認知行動療法の有効性について研究したものであり，不安症状のある発達障害児とその親への心理教育的支援について重要な知見を与えるものとして価値ある集積であると認める。よって学位申請者の野上慶子は，博士（学術）の学位を得る資格があるものと認める。